

平昌オリンピックにおけるカーリング女子 LS 北見の皆さんの活躍がとても心に残りました。幼友達だからこそ醸し出すことができるチームワークの麗しさ、豊かさ、強さを感じ入りました。多分、「そだねー」は、今年の流行語大賞の有力候補になることでしょう。

3位が決定し、円陣を組んで涙し歓喜する平昌での様子、女満別空港に降り立ったあとのインタビュー、そして故郷常呂での報告会と、その都度喜びを爆発させた笑顔、感極まって涙にぬれる表情が大きくテレビの画面に映し出されました。その一つ一つのシーンに見入りながら、平昌、女満別、常呂へと至るなかで選手たちの様子が次第に緩み、解放されていく感じがテレビを通してひしひしと伝わってくるのです。そこには確かに故郷でなければ表現できない喜びの深み、感動の大きさがありました。しかも LS 北見の選手たちの語る言葉の一つ一つが、これまた黄金のような重みと珠玉の輝きを放つ言葉であったことも驚きでした。とりわけ常呂の子供たちを前にして語った吉田知那美さんの挨拶が深く心に残りました。

「わたしは7歳の時からこの町でカーリングを始めました。正直、この町何もないよね。この町、小ちゃい時には何もなく、この町にいても、絶対夢は叶わないと思ってました。けど今は、ここにいなかったら叶わなかったなと思っています。ここにたくさん今日来てくれた子どもたちのみんなも、大切な仲間がいたりとか、家族がいたりとか、どうしても叶えたい夢があるとか。この町でも叶えられると思います。一生懸命、一緒に頑張っていけたらなと思っています。」

強い言葉、希望の言葉、励ましに満ちた言葉だと思います。この挨拶の言葉に聞き入りながら思い起こしていたのは、「隠岐の島」の海士町のことです。人口 2300 人の過疎の島です。その町の内道雄町長は、大胆な行政改革と産業創出政策で有名な方ですが、その町長さんが「ないものはない」を町の宣言として掲げているのです。

「ないものはない」と聞いて、みなさんは真っ先にどんな意味を思い起こすのでしょうか。離島のことで大抵の人は、真っ先に「何もない」ということを思い起こすのではないのでしょうか。しかし、日本語は不思議です。時に同じ言葉が正反対の意味を持つことがあるのです。たとえば訓読みで「一切れ」といえば「ほんの少し」という意味です。しかし、その同じ言葉を音読みで読めば「一切」となり「全て」という意味になります。それと同様「ないものはない」という言葉には、文字通り「ない」という意味とともに、それとは正反対の「なんでもある」という意味も読みとれるのです。海士町の HP に出てくる公式見解では、この宣言に「無くてもよい」という意味と、「大事なことはすべてここにある」という解釈をあてています。そしてその解説には「離島である海士町は都会のように便利ではないし、モノも豊富ではありません。しかしその一方で、自然や郷土の恵みは潤沢。暮らすために必要なものは充分あり、今あるものの良さを上手に活かしています」と記されていました。これまた素晴らしい逆転の発想ではないでしょうか。

宮城学院も少子化の波に洗われ、生徒募集、学生募集に苦闘しています。私も含め、ともすれば現実の厳しさを嘆いてしまいがちです。しかし、求められていることは吉田知那美さんや山内町長のように自分の置かれたところで一所懸命となり、その逆境を想像力と創造力をもって順境へと変えていくヴィジョンを堅持することではないでしょうか。それはまた使徒パウロが告げる「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません」(ローマ 5 章 3-4 節)との約束の御言葉に信頼して歩いていくということにほかなりません。新しき年度も心を高くあげ、望みをもって力強く歩んでまいりましょう。